



力動感あふれるスターンの演奏(左)
=12日、東京・渋谷のNHKホールで

今回、訪れた
ン(バイオリン、12日)とヨセフ
チェコ・フィル
・フツフロ(チェコ、11日)。
ライマン指揮) スターンはベートーベンハバイ
に二人の独奏者 オリン協奏曲、フツフロはドボ
ルジャークハチェロ協奏曲、であ



王者の風格持つ スターンの演奏

チェコ・フィル

疑いない。大地に両足を踏みしめ
て歩きたようなゆうゆうたるテ
ンが運び、あのオクターブの音
階を登りつめる。それは、もうス
ターン以外の、なにものでもない
一音一音が力動感を持った、独特
の語法といえるだろう。それに、
ただ美しいというだけでなく、あ
る臨場感、重量感を持った音がオ
ーケストラから抜け出てきこえ

る。弦には、いささか広すぎるN
HKホールでも。
残念ながら、ノイマンの棒が独
奏者のテンポや語法を十分に読み
きくことができないという面があ
る。なん回か、はらはらさせられ
るような場面もあったが、それも
風格と雄大さを持つものに一変し
てしまふ。ベートーベンの、この
強い磁力のようなスターンの演奏
作品は、まさに、そう演奏される
のにふさわしいものであることは
立ち直った。このあたりもスター
ンに見せてくれた特徴であった。
フツフロは、いかにも、きめて
まやかな味わいを持つ、このオー
ケストラといわば同輩の人のよう
だ。どこにも過激な表情づけなど
みられない。音量も大きい方では
ない。それが、一種の室内楽をき
く親密で、きめこまやかな味をつ
くりだす。第一楽章で心にしみ入る
ようなチェロの歌が木管とからんで
手ごわりの柔らかな温か味のある
織物をめぐらしたようなところな
ど……。

このまゝも、このオーケストラ
で感じたが、チェコ独特の柔らか
い響きの弦、ぬくもりをもった木
管群など心のなごむ個性的な音で
ある。ホルンなど忘れ難い音色。
それなりに水準の高い機能を持っ
ている。ノイマン以外の棒ではど
んな音が、音楽がつくれるのだろ
うか。こんなことをきいてみた
い。11日・東京文化会館、12日・
NHKホールで。

(俊)